地方都市郊外農業地帯住民の定住意向・環境評価に関する研究

—栃木県佐野市農業集落を対象として—

A Study of the Views about Settling Down in the Farmer's Hamlets Located
around a Local City. And the Valuations for Regional Facilities and the
Environmental Conditions of Neighborhood by Inhabitants.

—A Study of the Case at Sano City in Tochigi Prefecture—

蟹江 好弘*

Yoshihiro KANIE

I はじめに

農山村地域において、調和のとれた社会構成を再構築することは、過密・過疎が現在のように伸展している状況下では、きわめて解決困難な問題ではあるが、新たな定住の方策検討は、農村計画研究上重要な課題と考える。地域における定住人口は、夜間人口に加え、来訪人口、連携人口など広義の解釈による定住人口^{注1)}が非公式ではあるが使われている。狭義の定住人口は、歴史のあるコミュニティを構成し地域の民俗の習慣、共同活動などコミュニティ活動の担い手として重要である。従って、広義の定住人口による地域地区の活性化を期待しつつも、定住人口の定住性改善、ひいては新規参入人口の誘致も農村計画上重要な課題である。

本研究は、農村集落住民の居住地に対する居住性評価、将来の定住意向、そして定住に深く関わる物的環境条件を住民意識調査により明らかにする。

環境評価、指標化に関する既往の研究成果については、都市において1969年にシビルミニマムという概念が示され、以後農村計画においてもルーラルミニマムという言葉が聞かれるようになった。

既往の研究では、都市を対象としたメッシュデータ解析、多変量解析による指標化の成果がある。

例えば、土肥・若林^{注2)}は常磐線沿線市町村を

対象に住民の居住環境評価と定住意識の関連を数量化Ⅰ類、主成分分析により分析している。

また農村を対象とした最新の成果としては、袖ヶ浦市野里集落の班を対象とした、三国・中村の研究^{注3)}がある。本研究は、これらの先行研究を参考に、地方都市の旧村部に立地する複数の農業集落を対象とし、そこに常住する住民の将来の定住意向と物的生活環境条件への評価をアンケート結果をもとに手作業によって分析したものである。

II 研究方法・対象地

研究の手順は、まず地域や集落の現況と特徴を把握するため、既存統計資料の分析、既往の地域詳細調査結果^{注4)}（各種分析地図等）を整理した。次に市内の農業センサス区分による90集落を農業センサスによる集落カード等を分析し、概略的集落分級^{注5)}を行い、農業が活発に行われている集落を特定した。これらの作業を経て、アンケート項目の設定と、サンプル数を決定した。

本研究の構成とアンケート項目の枠組みについては、図1に示した通りである。質問の第1点は住民が居住する地域の居住性（住み良さ、住みにくさ）への評価、その理由。次いで、将来とも地域や集落に定住する意向はあるのか、そしてその理由は何かを明らかにする。

一方、これらを踏まえて、住み良さや定住性の

* 足利工業大学工学部建築学科 Department of architecture Faculty of engineering Ashikaga institute of technology

key Words : 1) 地方都市圏, 2) 定住, 3) 定住要件, 4) 社会資本, 5) 住民評価

図1 定住を視点とした研究の構成
Fig.1 Composition of Study on the View point of settling down

表1 アンケートの概要
Table1 The outlines of the questionnaire

摘 要	アンケート実施内容
実 施 時 期	平成3年12月配布、平成4年1月回収
実 施 方 法	市内において選定されている農政協力員によって各集落に配布、留置目録後、同協力員が訪問回収
調査対象集落	22集落、集計ではこれを12に統合
配布サンプル数	1,016部
回収サンプル数	917部
回 収 率	90.3%

条件と考える、地域施設、近隣生活環境への住民の評価傾向を明らかにする。

調査対象地域は、同じ目的で行った地域性の異なる7地域^{注6)}の中から、合併市^{注7)}であり、市街地周辺部に旧村(7町村)農業地帯を持つ人口8万人の地方中規模都市、栃木県佐野市とした。対象者は前記作業で選定した22集落の成人を対象に層化抽出法により、1,016名の被験者を抽出、市内の各集落に選定されている農政協力員によ

て配布回収した。分析は性別、年齢別、集落別の2重及び3重クロス分析を主とし、職業別、大都市居住経験の有無別を加えて考察し、また必要に応じ2質問間の相関性を分析した。

Ⅲ 佐野市に対する都市としての印象

1 居住地としての概括的印象

全体の傾向として、佐野市が「大変住みやすいまちだと思う」、「まあ住みやすい方ではないだろうか」(満足系^{注8)})は前者が8.7%、後者が49.6%、計58.3%であった。反面「時には住みにくいと思うことがある」は14.1%、「住みにくい」(不満系^{注9)})は2.5%、計16.6%と満足系の回答を大きく下回っている。性別傾向では、女性がやや住みやすいが多く、男性は若干住みにくい回答が多く見られる。年齢別では、男性の30代を除き、高年齢にな

図2 概略的集落分級・調査対象集落

Fig.2 The rural hamlets, its are roughly arranged classes and the objects for this study

るに従って住みやすいとの評価が高い。女性は特定の傾向が見られず、40代では住みやすいが多く70歳以上はこの評価が比較的低くなっている。

集落別傾向としては、高萩、越名、上富士、小中、免鳥、出流原の6集落において、住みやすいとの評価がやや低く、この内、免鳥を除き、市街地から遠い集落であることが注目される。職業別には、教員・製造業・公務員・第一種兼業農家において満足系の回答が高く、会社員・サービス業はやや低い。大都市居住経験者の意識においては大都市居住年数が長い程満足系の回答が高く、20年以上の居住経験者は低い。

表2 調査対象集落の概要

Table2 The outlines of the hamlets as the object for this study

集落名	地区の概要	集落中心から市街地までの空間距離	昭和40年から平成4年迄の人口増減率	農家の現状			主要作物	市街化区域指定の現況
				世帯総数(1995年)	農家総数(1995年)	農家率		
植下第3・第4	市街地南部にあり、土地区画整理事業が推進され広域幹線国道沿線にある	2km	88.9%増加	375	35	9.3%	水稻	第4の約30%が市街化区域
船津川	市域の最南端、渡良瀬川沿岸に位置する純農業集落である	5km	23.4%減少	232	114	49.1%	水稻 二条小麦	区域外
西浦	市域の東端にあり、中心を高速道路が通過している	4km	20.1%減少	82	41	50.0%	水稻	区域外
高萩	市街地外周に位置する農業集落であり、人口が急増、庶住化が進行	2.3km	104.4%増加	1,087	52	4.8%	露地野菜	大半が市街化区域内
越名	多くの温田を抱える農業集落であり、人口減少地区となっている	4km	3.5%減少	240	66	27.5%	水稻 露地野菜	区域外
大伏	旧日光御使街道沿線、市街地に隣接するため人口は急増している	2.4km	102.8%増加	1,605	62	3.9%	水稻	地区の大半が市街化区域
上富士	市街地北東の山間にかかる集落であり、人口は減少傾向にある	4.5km	28.5%減少	73	45	61.6%	水稻	県立自然公園内の集落
小中	市街地西部にあり、近年近隣地域の幹線道路整備と共に市街化が伸展	3km	49.4%増加	560	67	12.0%	水稻 二条小麦 いちご	一部区域内
免鳥	市街地西部にあり、旧国道沿線にあるため市街化が伸展	2.4km	41.3%増加	106	33	31.1%	水稻 二条小麦 いちご	一部区域内
上羽田	広域幹線国道の沿線にあることから開発の圧力が高い	3.4km	9.7%減少	218	84	38.5%	果樹(梨)	区域外
出流原	市街地の北端にあり、市街地から最も離れている農業集落である	6.7km	4.5%減少	140	27	19.3%	水稻	一部区域内
赤見	出流原に隣接し、農業集落が保全されている。近年都市機能が立地しはじめ様相が変わった	5.5km	7.4%減少	339	78	23.0%	水稻 二条小麦	一部区域内

表3 「住みにくい」と回答した住みにくさの理由
Table3 The reasons of an answer, "uncomfortable to live" by distinction of the sexes and the ages.

摘要	性別	買物が不便	病院その他施設利用面で不便	交通が不便	自然条件がきびしい	生計を得る上で市内では満たされない	子供を育てる上で不便	住宅に問題がある	人間関係や生活慣習に問題がある	老人を介護する上で問題がある	施設や活動など市の文化性に問題がある	その他	計 (除非該当・未回答)
年齢別													
20歳代	男	8(24.2)	5(15.2)	7(21.2)	0	1(3.0)	0	2(6.1)	3(9.1)	1(3.0)	4(12.1)	2(6.1)	33(100)
	女	7(30.4)	5(21.7)	4(17.4)	2(8.7)	0	1(4.3)	0	1(4.3)	1(4.3)	2(8.7)	0	23(100)
	計	15(26.8)	10(17.9)	11(19.6)	2(3.6)	1(1.8)	1(1.8)	2(3.6)	4(7.1)	2(3.6)	6(10.7)	2(3.6)	56(100)
30歳代	男	7(13.7)	7(13.7)	11(21.6)	2(3.9)	3(5.9)	5(9.8)	2(3.9)	2(3.9)	5(9.8)	4(7.8)	3(5.9)	51(100)
	女	8(22.9)	7(20.0)	10(28.6)	1(2.9)	1(2.9)	2(5.7)	0	2(5.7)	2(5.7)	1(2.9)	1(2.9)	35(100)
	計	15(17.4)	14(16.3)	21(24.4)	3(3.5)	4(4.7)	7(8.1)	2(2.3)	4(4.7)	7(8.1)	5(5.8)	4(4.7)	86(100)
40歳代	男	9(15.5)	10(17.2)	11(19.0)	5(8.6)	0	5(8.6)	1(1.7)	4(6.9)	4(6.9)	7(12.1)	2(3.4)	58(100)
	女	4(18.2)	4(18.2)	7(31.8)	0	2(9.1)	1(4.5)	0	0	1(4.5)	2(9.1)	1(4.5)	22(100)
	計	13(16.3)	14(17.5)	18(22.5)	5(6.3)	2(2.5)	6(7.5)	1(1.3)	4(5.0)	5(6.3)	9(11.3)	3(3.8)	80(100)
50歳代	男	12(22.6)	9(17.0)	13(24.5)	4(7.5)	4(7.5)	3(5.7)	2(3.8)	2(3.8)	1(1.9)	2(3.8)	1(1.9)	53(100)
	女	11(28.2)	7(17.9)	7(17.9)	3(7.7)	0	4(10.3)	0	3(7.7)	2(5.1)	2(5.1)	0	39(100)
	計	23(25.0)	16(17.4)	20(21.7)	7(7.6)	4(4.3)	7(7.6)	2(2.2)	5(5.4)	3(3.3)	4(4.3)	1(1.1)	92(100)
60歳代	男	5(17.9)	4(14.3)	6(21.4)	1(3.6)	3(10.7)	3(10.7)	0	1(3.6)	3(10.7)	1(3.6)	1(3.6)	28(100)
	女	4(23.5)	3(17.6)	5(29.4)	1(5.9)	0	0	0	2(11.8)	2(11.8)	0	0	17(100)
	計	9(20.0)	7(15.6)	11(24.4)	2(4.4)	3(6.7)	3(6.7)	0	3(6.7)	5(11.1)	1(2.2)	1(2.2)	45(100)
70歳以上	男	5(17.2)	5(17.2)	5(17.2)	2(6.9)	3(10.3)	1(3.4)	1(3.4)	2(6.9)	3(10.3)	1(3.4)	1(3.4)	29(100)
	女	5(29.4)	2(11.8)	3(17.6)	0	2(11.8)	0	0	1(5.9)	2(11.8)	1(5.9)	1(5.9)	17(100)
	計	10(21.7)	7(15.2)	8(17.4)	2(4.3)	5(10.9)	1(2.2)	1(2.2)	3(6.5)	5(10.9)	2(4.3)	2(4.3)	46(100)
集落計	男	46(18.3)	40(15.9)	53(21.0)	14(5.6)	14(5.6)	17(6.7)	8(3.2)	14(5.6)	17(6.7)	19(7.5)	10(4.0)	252(100)
	女	39(25.5)	28(18.3)	36(23.5)	7(4.6)	5(3.3)	8(5.2)	0	9(5.9)	10(6.5)	8(5.2)	3(2.0)	153(100)
	小計	85(21.0)	68(16.8)	89(22.0)	21(5.2)	19(4.7)	25(6.2)	8(2.0)	23(5.7)	27(6.7)	27(6.7)	13(3.2)	405(100)

注：1) 限定質問であり、満足系及び特に意識していないを除く。

2) () 内数字は各欄合計欄に対する比率(%)を示す。小数点第2位を四捨五入

2 住み良いと回答した 「住み良さの理由」

全体としては、「自然条件に恵まれている」-24.9%、「生活上便利」-11.7%、「公害がない」-11.1%、「人間関係が良い」-8.1%が上位の項目であり、性別・年齢別の差は小さい。自然条件のみ男性の高齢者が高い。女性では、40代、70代に傾向の変わった回答が見られ、40代では、公害のないこと、自然条件が強く現れ、70代は人間関係の比率が高い。さらに集落別傾向においては大きな差が見られ、第一位項目として「生活上便利である」をあげているのは、植下・高萩・越名・犬伏の4集落、「自然条件」をあげているのは、船津川・小中・免鳥・上羽田・出流原・赤見の6集落、「公害がない」は上富士、「人間関係の良さ」は西浦であった。

集落別・性別傾向については、植下・西浦・高萩・越名の4集落において、第一位項目が異なる

図3 集落別に見た、定住意向

Fig.3 Intentions of the settling down in a city by distinction of hamlets

大きな差異が見られる。

3 住みにくさの理由

住みにくい、ときには住みにくいと思うことがあるとの回答は、それぞれ14.1%、2.5%と少ないが、この16.6%の回答者による「住みにくさ」の理由は表3の通りとなっている。

上位3項目は、買物の不便さ、病院その他施設利用・交通の不便さが各年代別、性別ともに共通している。買物の不便さは20代男性に強く交通の不便さは20代から50代までの女性に強く、現れている。また30代、40代の男性に、育児上の不便さ、

表4 佐野市に住み続ける理由
Table4 The reasons of settling down in Sano city by distinction of the sexes and the ages

摘要 年齢別	性別	土地がある ので	先祖の墓 があるので	住み慣れた 土地だから	特に不便 を感じない から	友人・知 人が沢山 いるので	自然が豊 かだから	災害がな いので	子供を育て る上で環境 が良いから	発展が期 待できる から	その他	合計
20 歳代	男	17(17.2)	13(13.1)	19(19.2)	9 (9.1)	17(17.2)	10(10.1)	5 (5.1)	3 (3.0)	6 (6.1)	0	99(100)
	女	17(18.5)	11(12.0)	14(15.2)	12(13.0)	12(13.0)	10(10.9)	8 (8.7)	5 (5.4)	3 (3.3)	0	92(100)
	計	34(17.8)	24(12.6)	33(17.3)	21(11.0)	29(15.2)	20(10.5)	13 (6.8)	8 (4.2)	9 (4.7)	0	191(100)
30 歳代	男	50(24.3)	30(14.6)	38(18.4)	19 (9.2)	24(11.7)	11 (5.3)	15 (7.3)	12 (5.8)	6 (2.9)	1 (0.5)	206(100)
	女	28(23.9)	19(16.2)	20(17.1)	8 (6.8)	8 (6.8)	9 (7.7)	14(12.0)	7 (6.0)	3 (2.6)	1 (0.9)	117(100)
	計	78(24.1)	49(15.2)	58(18.0)	27 (8.4)	32 (9.9)	20 (6.2)	29 (9.0)	19 (5.9)	9 (2.8)	2 (0.6)	323(100)
40 歳代	男	50(23.7)	37(17.5)	39(18.5)	13 (6.2)	26(12.3)	16 (7.6)	16 (7.6)	6 (2.8)	8 (3.8)	0	211(100)
	女	37(19.5)	27(14.2)	34(17.9)	17 (8.9)	18 (9.5)	18 (9.5)	16 (8.4)	15 (7.9)	7 (3.7)	1 (0.5)	190(100)
	計	87(21.7)	64(16.0)	73(18.2)	30 (7.5)	44(11.0)	34 (8.5)	32 (7.9)	21 (5.2)	15 (3.7)	1 (0.2)	401(100)
50 歳代	男	76(26.4)	43(14.9)	44(15.3)	20 (6.9)	31(10.8)	25 (8.7)	24 (8.3)	12 (4.2)	10 (3.5)	3 (1.0)	288(100)
	女	44(21.8)	35(17.3)	40(19.8)	14 (6.9)	24(11.9)	15 (7.4)	13 (6.4)	8 (4.0)	7 (3.5)	2 (1.0)	202(100)
	計	120(24.5)	78(15.9)	84(17.1)	34 (6.9)	55(11.2)	40 (8.2)	37 (7.6)	20 (4.1)	17 (3.5)	5 (1.0)	490(100)
60 歳代	男	63(25.3)	43(17.3)	44(17.7)	17 (6.8)	31(12.4)	16 (6.4)	20 (8.0)	6 (2.4)	8 (3.2)	1 (0.4)	249(100)
	女	36(21.1)	33(19.3)	31(18.1)	8 (4.7)	22(12.9)	12 (7.0)	11 (6.4)	9 (5.3)	9 (5.3)	0	171(100)
	計	99(23.6)	76(18.1)	75(17.9)	25 (6.0)	53(12.6)	28 (6.7)	31 (7.4)	15 (3.6)	17 (4.0)	1 (0.2)	420(100)
70歳以上	男	42(23.6)	35(19.7)	33(18.5)	12 (6.7)	15 (8.4)	14 (7.9)	12 (6.7)	7 (3.9)	6 (3.4)	2 (1.1)	178(100)
	女	36(23.4)	35(22.7)	27(17.5)	13 (8.4)	18(11.7)	9 (5.8)	9 (5.8)	5 (3.2)	2 (1.3)	0	154(100)
	計	78(23.5)	70(21.1)	60(18.1)	25 (7.5)	33 (9.9)	23 (6.9)	21 (6.3)	12 (3.6)	8 (2.4)	2 (0.6)	332(100)
集 落 計	男	298(24.2)	201(16.3)	217(17.6)	90 (7.3)	144(11.7)	92 (7.5)	92 (7.5)	46 (3.7)	44 (3.6)	7 (0.6)	1,231(100)
	女	198(21.4)	160(17.3)	166(17.9)	72 (7.8)	102(11.0)	73 (7.9)	71 (7.7)	49 (5.3)	31 (3.3)	4 (0.4)	926(100)
	小計	496(23.0)	361(16.7)	383(17.8)	162 (7.5)	246(11.4)	165 (7.6)	163 (7.6)	95 (4.4)	75 (3.5)	11 (0.5)	2,157(100)

注：() 内数字は各欄合計値に対する比率(%)であり、小数点第2位を四捨五入した。

20代から40代の男性に、市の文化性に問題があるとの回答が多い。

Ⅳ 佐野市への定住意向

1 定住意向の全体的傾向

市において、「子供や孫の代まで住み続けたい」(永住希望^{注10)})と「自分の代だけでも住み続けたい」(暫定的定住希望^{注11)})との回答は、前者が、54.7%と過半数を超え、後者は22.7%となっている。つまり77.4%が定住希望者となる。定住意向は性別において大きな差を見ることができないが、女性は永住希望が男性より若干低い反面、どちらとも言えないとの中庸の回答がやや多い。これは20代、30代の影響による。

年齢別傾向においては、20代の定住希望者が男女とも50%とやや低い、高年齢になるに従い定住希望が高くなる傾向がある。

集落別では全集落において定住希望が70%を超えているが、とりわけ植下・西浦・上富士・免鳥・出流原の5地区ではこれが80%を超え、きわめて高い。こうした傾向の中で、「どちらとも言え

ない」を含み、転住の希望がやや高いのは、船津川・高萩・赤見の3地区である。

職業別意識傾向では、定住意向が公務員-92.9%、第一種兼業農家-88.6%、専業農家-83.9%などと高く、サービス業、会社員は比較的低い。

2 住み続ける理由

次に、本研究の重要な視点のひとつとして何故住み続けたいのかを分析したものが表4である。

この中で、「土地があるので」「住みなれた土地だから」「先祖の墓があるので」「友人・知人が沢山いるので」は男女に共通して上位4項目となっている。とりわけ30代以上の男性においては、「土地がある」がきわめて高く、不動産の存在が地域に定住する上での、要件となっている。

集落別においても、この傾向は変わらないが、上富士・出流原・赤見では「自然が豊かだから」、免鳥・出流原では「災害がない」との回答が他と比較して高かった。

3 転居したい理由

転居したいとの回答は全体で31人(2.6%)ときわめて少数であるが、施設利用等生活の利便性をあげている。

4 市への評価と定住意向との相関性

佐野市の居住性に関する印象と市への定住の意向性をクロスした結果が表5である。結果的には「まあ住み良い方ではないだろうか」という相対的かつ控えめな評価が最も高く、定住意向についても、この評価を軸に、定住希望者は全体の45%

に達している。

また大変住み良いという最高の評価をしている中で定住を希望する者は8%に過ぎず、逆に不満系の回答者の内、他市町村へ転住したいと希望する者は17人(1.8%)に過ぎない。また時に住みにくいことがある。住みにくいとの回答の中にも

子や孫の代まで住み続けたい者が43人(4.6%)あり、自分の代だけは住み続けるとする者49人(5.3%)と合わせると102人(11.1%)にのぼる。

これは環境への不満と地域への定住意向は別のこととして理解することができる。

V 既存地域施設への評価傾向

1 評価の高い施設

ここでは住民の定住性に深く関わると思われる、図4の主要地域施設への評価を見る。

アンケートにおいては、16種類の施設に関して質問を行ったが、その内既存の学齢前施設・義務教育施設・拠点的文化施設・公共図書館・体育・スポーツ施設に関しては、いずれも満足系の評価が高い結果が見られた。

この傾向は高年齢になるに従い高くなる状況であり、女性の評価が若干低い。

全体的傾向については図5、評価の高い施設の例としての義務教育7施設に対する年齢別評価傾

表5 市への印象と定住意向の相関性
Table5 The interrelations between the impressions for a city and the intentions of settle down

居住意向 市への評価	年齢別	子や孫の代 まで住み続け たい	自分の代だ けは住み続け たい	どちらと も悪くない	できれば他 市町村へ転 住したい	ぜひ他市 町村へ転 住したい	未回答	合 計
大変住みやすい まちだと思う	20代	2(50.0)	1(25.0)	1(25.0)	0	0	0	4(100)
	30代	5(83.3)	0	1(16.7)	0	0	0	6(100)
	40代	8(88.9)	1(11.1)	0	0	0	0	9(100)
	50代	16(94.1)	1(5.9)	0	0	0	0	17(100)
	60代	18(94.7)	0	0	0	0	1(5.3)	19(100)
	70歳～	24(96.0)	1(4.0)	0	0	0	0	25(100)
	小計	73(92.4)	4(5.1)	2(2.5)	0	0	1(1.3)	80(100)
まあ住みやすい 方ではない だろうか	20代	20(37.7)	17(32.1)	15(28.3)	1(1.9)	0	0	53(100)
	30代	45(58.4)	21(27.3)	10(13.0)	1(1.3)	0	0	77(100)
	40代	54(64.3)	23(27.4)	7(8.3)	0	0	0	84(100)
	50代	69(71.9)	21(21.9)	6(6.3)	0	0	0	96(100)
	60代	70(84.3)	12(14.5)	1(1.2)	0	0	0	83(100)
	70歳～	43(69.4)	18(29.0)	0	0	0	1(1.6)	62(100)
	小計	301(66.2)	112(24.6)	39(8.6)	2(0.4)	0	1(0.2)	455(100)
特に意識して いない	20代	8(25.8)	5(16.1)	17(54.8)	1(3.2)	0	0	31(100)
	30代	15(37.5)	6(15.0)	19(47.5)	0	0	0	40(100)
	40代	14(34.1)	7(17.1)	18(43.9)	2(4.9)	0	0	41(100)
	50代	17(48.6)	10(28.6)	7(20.0)	1(2.9)	0	0	35(100)
	60代	15(53.6)	8(28.6)	4(14.3)	1(3.6)	0	0	28(100)
	70歳～	14(51.9)	7(25.9)	5(18.5)	0	0	1(3.7)	27(100)
	小計	83(41.1)	43(21.3)	70(34.7)	5(2.5)	0	0	202(100)
ときに住みに くいと思うこ とがある	20代	1(4.5)	8(36.4)	10(45.5)	2(9.1)	1(4.5)	0	22(100)
	30代	8(27.6)	10(34.5)	7(24.1)	4(13.8)	0	0	29(100)
	40代	7(31.8)	7(31.8)	7(31.8)	1(4.5)	0	0	22(100)
	50代	11(37.9)	11(37.9)	3(10.3)	3(10.3)	0	1(3.4)	29(100)
	60代	7(53.8)	4(30.8)	2(15.4)	0	0	0	13(100)
	70歳～	6(42.9)	5(35.7)	2(14.3)	1(7.1)	0	0	14(100)
	小計	40(31.0)	45(34.9)	31(24.0)	11(8.5)	1(0.8)	1(0.8)	129(100)
住みにくい	20代	0	0	1(50.0)	1(50.0)	0	0	2(100)
	30代	0	0	1(33.3)	2(66.6)	0	0	3(100)
	40代	1(16.7)	2(33.3)	2(33.3)	0	1(16.7)	0	6(100)
	50代	2(40.0)	2(40.0)	1(20.0)	0	0	0	5(100)
	60代	1(25.0)	0	2(50.0)	0	0	1(25.0)	4(100)
	70歳～	0	0	2(66.7)	0	1(33.3)	0	3(100)
	小計	4(17.4)	0	9(39.1)	3(13.0)	2(8.7)	1(4.3)	23(100)
未 回 答	20代	0	0	1(25.0)	0	0	3(75.0)	4(100)
	30代	0	0	0	0	0	0	0
	40代	0	0	0	0	0	2(100)	2(100)
	50代	0	0	0	0	0	6(100)	6(100)
	60代	0	0	0	0	0	10(100)	10(100)
	70歳～	1(14.3)	0	0	0	0	6(85.7)	7(100)
	小計	1(3.4)	0	1(3.4)	0	0	27(93.1)	29(100)
合 計	20代	31(26.7)	31(26.7)	44(37.9)	5(4.3)	1(0.9)	0	116(100)
	30代	73(47.1)	37(23.9)	38(24.5)	7(4.5)	0	0	155(100)
	40代	84(51.2)	40(24.4)	34(20.7)	3(1.8)	1(0.6)	0	164(100)
	50代	115(61.2)	45(23.9)	17(9.0)	4(2.1)	0	1(0.5)	188(100)
	60代	111(71.2)	24(15.4)	9(5.8)	1(0.6)	0	2(1.3)	156(100)
	70歳～	87(63.0)	31(22.5)	9(6.5)	1(0.7)	1(0.7)	2(1.4)	138(100)
	合 計	502(54.7)	208(22.7)	152(16.6)	21(2.3)	3(0.3)	31(3.4)	917(100)

*注：比率は小数点第2位を4捨5入

図4 佐野市における主要地域施設分布
Fig.4 Locations of the principal regional facilities in Sano city

図5 既存地域施設に対する評価
Fig.5 The valuations for the existing regional facilities

向は図6に示した通りである。

特に根幹的地域施設というべき、保育所・幼稚園・小学校・中学校など、地域社会に密着して、既に一定の水準に達している施設に関しては、全般的に評価が高く、これも既に整備が完了している。市民文化会館・公共図書館・総合運動場に関しても評価が高い。

2 評価の低い施設

逆に評価の低かった施設としては、病院等医療施設・老人福祉施設と娯楽レクリエーション施設^{注12)}・市民の余暇活動施設・地区ゲートボール場がある。中でも病院等医療施設、老人福祉施設に関しては30～40代の男性において不満を示し、

図6 性別・年齢別による義務教育施設への評価
Fig.6 The valuations for the elementary, junior high schools by distinction of the sexes and the ages

30代女性は老人福祉施設への不満を示している。不満系の回答項目においては若年層ほど不満の回答が強く、医療・老人福祉施設に関しては高齢者の不満が強い。

また高等学校や市営住宅に関しては、満足系の回答と、不満系の回答が半ばしているが、若年層にやや不満が強く現れている。

これら評価の低い施設に関しては、本調査の範囲で不満の原因を明らかにすることはできなかったが、医療施設に関しては第2次医療拠点は整備されているものの、家庭医などの適切な分布、医療拠点までの距離に不満があるのではないかと推察される。老人福祉施設に関しては、現在養護老人ホーム3、特別養護老人ホーム2、軽費老人ホーム1、老人福祉センター3があるが、地区単位の広場、憩いの家などは必ずしも十分ではない。また娯楽・レクリエーション施設は、昨今需要が増加しているアウトドアライフに対応し

図7 性別・年齢別による娯楽・レクリエーション施設への評価

Fig.7 The valuations for the facilities of amusements and recreations by distinction of the sexes and the ages

図8 集落別による医療・義務教育施設への評価

Fig.8. The valuations for the medical facilities, elementary and junior highschools by distinction of the hamlets

た施設や、生涯教育など、ライフスタイルの変化に対応した施設への需要として解釈できる。

評価が低い施設の例として、娯楽・レクリエーション施設の性別年齢別傾向を図7に示す。

3 集落別傾向

分析の対象とした12集落別に評価の傾向を述べる。まず評価の低かった、医療施設、老人福祉施設に関しては、いずれも市街地から遠隔にあり、交通面もやや不便な集落、施設から遠い集落の評価が低い。これは出流原をはじめ、船津川・西浦・高萩・越名であり、老人福祉施設については植下・犬伏・上富士・上羽田の評価も低い。

逆に評価の高い施設と集落との関係を見ると、

市街地に近いか、施設への接近性に優れた集落の評価は全般的に高く、遠隔集落では評価が低い。

娯楽・レクリエーション施設に関しては、今後の整備課題であることから全体的に評価傾向が低い結果となっている。

集落別評価の特徴として、評価の高い義務教育施設、評価の低い医療施設を図8に示す。

4 職業別傾向

職業別傾向としては、全体的に満足系の比率の高い施設に関しては、各職業とも高く、不満系に強い回答を示す施設は各職業とも類似した傾向にある。しかしながら、サービス業と製造業は全体として満足系の評価が高かった施設すべて（製造業は体育系施設を除く）、に対して、「普通」という中庸の回答が高くなっている。公務員の文化系施設に対する評価もこれと同じである。

不満系の回答が高い施設に関しては、会社員が医療・老人福祉・高等学校・娯楽・レクリエーション施設に対し、特に不満の傾向を示し、公務員は医療施設に不満を示している。また老人福祉施設に関しては、教員・公務員・製造業・会社員・専業農家の順に不満の傾向が高い。

5 大都市居住経験者の地域施設評価傾向

大都市居住経験3年以上の回答者の回答を加算し、居住経験なしの回答者との評価傾向の比較を行った結果、10種類の施設の評価において、全体的には両者とも満足の傾向、不満の傾向が類似していることがわかった。

居住経験の有無により、評価の差が若干見られるのは、全体的に満足の評価の高い施設に関しては、大都市居住経験者がわずかに低く、逆に不満の傾向が強かった施設に関してはこれが明確である。

以上の比較より、大都市居住経験と環境評価との関係は希薄であることがわかった。

VI 近隣生活環境に関する評価傾向

近隣生活環境に関する、物的・非物的項目についての全12項目の質問中、ここでは物的な8項目に関し評価傾向を述べる。

全体的な傾向として、満足系の高い項目はな

図9 近隣生活環境項目に対する評価
Fig.9 Valuations to the principal conditions in the neighborhood by the inhabitants

図10 性別・年齢別による生活排水施設への評価
Fig.10 The valuations for the drain systems in the hamlets by distinction of the sexes and the ages

図11 集落別に見た集会施設・生活排水施設への評価
Fig.11 The valuations for the small community facilities in the hamlets and the drain systems by distinction of the hamlets

い。この傾向に関しては図9の通りである。また性別・年齢別・集落別に異なった傾向が見られるため以下詳細を述べる。

1 性別・年齢別傾向

まず性別の評価傾向上、特徴が見られるのは、近隣生活道路・街灯・生活排水施設・地区運動公園の4項目である。集落内道路は男性側に不満が高く、街灯は20代・30代の女性の不満が高い。また生活排水施設については40代・50代の女性の不満が特に高い。全体的に高年齢になるに従って満足系が高まり、不満系が低下する傾向が認められるが、集落内道路・植栽については例外である。満足系が不満系を上回るのは、60代・70代の男女における集会施設・ゲートボール場のみであり、近隣生活環境に関しては、性別・年齢別ともに不満を抱えていることがわかった。

特に不満傾向が強く現れている生活排水施設への性別年齢別評価を図10に示す。

2 集落別傾向

質問項目12項目についての集落別傾向を述べる。集落内道路・交通安全施設は市街地に近い集落における満足系の回答が高く、不満系が低い。また街灯は免鳥以外の全集落、植栽・生活排水施設も全集落において不満の傾向が顕著であった。

特に生活排水施設に関する不満系の回答は、全集落が40%を超えており、12集落中7集落が50%を超えて高い。また集会施設に対し、植下・犬伏・小中・上羽田等の満足系回答が高く、船津川・越名・上富士・出流原の不満足系回答が高いのは、施設の更新が行われたか否かの相違である。

評価がやや高い、低い施設への例として、集会所、生活排水施設への評価傾向を、図11に示す。

3 職業別傾向

各項目別に不満の回答を整理し、不満傾向の高い6職種を見ると、会社員・サービス業・公務員・主婦・教員・その他において、いずれも不満傾向が高いことがわかった。反面専業・第1種兼業農家の不満傾向は生活排水・植栽・ゲートボール場のみ局部的に現れている。また第2種兼業農家は4種目について不満の傾向を示している。

4 大都市居住経験者の近隣生活環境評価傾向

地域施設同様、大都市居住経験3年以上の回答

者と非経験者を比較してみると、大都市居住経験者において、各環境項目に対する満足系の回答が低く、不満系の回答が若干高く現れているものの、全体的な評価傾向は類似している。ここでも大都市居住経験の有無が生活環境の評価基準として希薄であると考えられる。

Ⅶ 総合的考察

佐野市はその都市規模から見て、大型の地域施設、根幹的地域施設に関しては、同規模の他都市と比較して一定の水準で整備が進んでいる。特に地域社会に密着した学齢前施設、義務教育施設の設備は既に終了している。

選択的施設は、市民文化会館、郷土博物館、保健センター、総合運動場、市民プールなど次々に整備され、一応の水準まで達している。また老人福祉施設についても、特別養護老人ホーム3施設、養護老人ホーム1施設、軽費老人ホーム1施設、老人福祉センター3施設がある。医療施設に関しては、第2次医療拠点^{注13)}となる病院を含み、病院4施設、一般診療所60施設がある。

このような状況に対し、回答者の58.3%が住み良いとの回答を、77.4%が定住を希望していることがわかった。(中庸の回答を除く) またこの両者のクロスにおいては、住み良いから定住する－53.4%、住みにくいから転住したい－1.9%、住み良いが転住したい－0.2%、住みにくいから定住する－9.7%という傾向がわかった。

このように、定住条件に関わる物的環境条件である現状の都市機能、近隣生活環境に対しては、とりわけ強い満足感はないものの、転住するには至らないとの意向と解釈できよう。

地域施設、近隣生活環境については、住み良さ、すみにくさに関係が深いと思われるが、公共輸送の不便さ、路線バスの衰退など、住民の生活行動を支える足が不便な反面、自家用車の普及状況が群馬県とともに、全国的に高い位置にあることから、生活上不満足な部分は、近隣都市を利用するなど、広域的な行動圏の拡大によって満たしていることを付け加えておかなければならない。

定住希望者、転住希望者別に地域施設の評価傾

図12 定住・転住希望別に見た地域施設への評価

Fig.12 The valuations for the principal regional facilities by distinction of people who wish settle down and who wish remove their dwelling.

向を見たものが図12であるが、転住希望者が少ないことから、母集団を拡大して図化したものである。これによると、転住希望者にはほとんどの地域施設に対して不満の傾向が強く現れており、定住希望者のそれとは異なる結果となった。

これは、定住条件に深く関わって、地域施設、近隣生活環境条件が存在し、これら社会資本整備のあり方によっては、転住の意向をある程度抑制することが期待されるということであろう。

以上を総括し、研究目的の項で述べた、定住に関わる物的環境条件整備としては、いわゆる従前型の地域施設の量や分布、そして都市の後追的な近隣環境整備ではなく、地域住民の意向を十分反映した、地域固有のむらづくりを推進し、その中から、整備の方向性を把握する必要がある。

補 注

注1) 蟹江好弘・藤本尚久・他 平成4年度 広域農林地総合開発整備調査 (1993) pp.96

- 注2) 土肥・若林は、常磐線沿線市町村を対象として多変量解析の手法により、住民の居住環境評価の構造・定住意識・地域交流との関係进行分析。
- 注3) 三国・中村は、千葉県袖ヶ浦市野里集落を対象として、農村集落の班の重要性に着目し、その住意識の特性を述べている。
- 注4) 筆者等が参加して、1983年に佐野市の行った佐野市土地分類調査(細部調査)
- 注5) 福沢宗道・蟹江好弘 佐野市市域開発整備構想調査(1985)で、将来の土地利用を展望する指針として、概略的集落分級を行った。これは農林業センサスの集落カードを用い、①土地条件(畑地率、経営耕地増減率、耕地利用率)、②農業労働力条件(兼業農家率、農家数増減率、農家人口増減率、農業就業人口増減率)、③農業経済条件(農地生産性、農産物販売額、経営耕地規模)の3分野より手集計で集落の農業勢力を等級区分した。
- 注6) 1989年一栃木県岩舟町(平地農村住民)1990年一栃木県葛生町(中山間地域住民)茨城県那珂湊市(市営住宅居住者)1991年一群馬県館林市(市街地居住者)栃木県佐野市(農業集落居住者)1994年一栃木県鹿沼市(全地域居住者)足利市(混住地区居住者)の調査を地域地区別定住意向の差異を知るために実施した。
- 注7) 和田幸信 学位論文(1987) pp.64において氏は地方都市を既成市と合併市に区分。
- 注8) 市に対する印象評価の項においては「大変住み良いまちだと思う」、「まあ住み良い方ではないだろうか」の回答を加算して、満足系とする。地域施設等の評価の項においては、「大変満足」「やや満足」を加算して満足系とする。
- 注9) 市に対する印象評価の項で「時には住みにくいと思うことがある」「住みにくい」を加算して、不満系とする。地域施設等の評価の項においては「やや不満」「不満」を不満系とする。
- 注10) 質問の意図として、次世代においても定住する意向があるか否かが重要とし、永住希望とした。
- 注11) 子供の世代になったら、住み続けるかどうかかわからないという不安定要素があるものと考え、暫定的定住希望とした。
- 注12) 将来の余暇時間増大に対応する、たとえばアウトドアライフのための、オートキャンプ場、ピクニック広場、親水公園等新しい施設の意味。
- 注13) 医療施設の建築計画者による医療圏の概念とは若干異なるが、地方都市における医療施設の位置

づけとして、概ね第三次圏を利用圏とする拠点の医療施設は第二次医療拠点と呼ばれている。

参考・引用文献

- 1) 三国正勝・中村攻(1993):「農村集落の班を中心とした住環境および住意識の特性―袖ヶ浦市野里集落におけるケーススタディー」『日本建築学会計画系論文報告集』(447) pp.69-78
- 2) 佐藤誠治・小谷和徳・片岡正喜(1987):「地方都市の都心域における居住者層の累計と居住意識―大分市の都心域における実証的研究」『日本都市計画学会学術研究論文集』(21) pp.49-54
- 3) 土肥博至・若林時郎(1986):「住民の居住環境評価と定住意識の関連についての考察」『日本都市計画学会学術研究論文集』(20) pp.175-180
- 4) 田畑 修・鳴海邦碩・土肥絵理子(1985):「都市居住者の環境評価に関する考察」『日本都市計画学会学術研究論文集』(20) pp.175-180
- 5) 森川 稔(1982):「農山村青少年の居住環境評価と転出・帰還指向―滋賀県朽木村を事例として―」『日本都市計画学会学術研究論文集』(17) pp.163-168
- 6) 佐々波秀彦・畑 龍徳(1973):「住民属性と環境特性を考慮した居住環境水準の評価構造の設定に関する考察―東京都区部におけるアンケート調査結果を基として―」『日本都市計画学会学術研究論文集』(11) pp.187-192
- 7) 国土庁地方振興局(1978) 定住構想と農村整備―農村地域の定住環境整備―
- 8) 宮崎県農政水産部(1979) 農村定住条件整備検討調査―都城・北諸県地域―
- 9) ㈱地域社会計画センター(1979) 農村定住条件整備検討調査報告書
- 10) 和田幸信学位論文(1987) 地方小都市の地域的特性とその居住環境整備課題に関する研究pp.5-9
- 11) 日本建築学会建築計画委員会地域施設小委員会(1988) 密住地域と疎住地域における地域施設計画研究と実際 昭和63年度 日本建築学会大会 建築計画部門協議会資料
- 12) 蟹江好弘(1990) 人口減少地域における住民の定住意向に関する研究―栃木県葛生町の場合―日本建築学会(中国)大会学術講演梗概集
- 13) 国民生活指標(1990) 経済企画庁国民生活局編
- 14) 国民の意識とニーズ(平成2年度国民生活選考度調査)(1990) 経済企画庁国民生活局編

- 15) 日本建築学会・農村計画委員会 (1991) 日本建築学会大会 (東北)・研究協議会・農村計画委員会 討論資料集大会
- 16) 蟹江好弘 (1995) 地方都市圏における住民の定住

意向に関する研究 そのⅢ 地方中規模都市である栃木県鹿沼市の旧町村別傾向
日本建築学会大会 (北海道) 学術講演梗概集

The problem of maintaining population levels in local cities and the agricultural hamlets around them or far from them has been a serious subject on the rural planning. The conditions of maintaining population levels are composed of many kinds of fields. And many researchers tackle with its study.

The aim of this study is to look at the following points:

- ①Views of the inhabitants to the habitabilities of the hamlets in local cities.
- ②Whether inhabitants intend, to continue living in the hamlets and the cities.
- ③The value put on the principal regional facilities by the inhabitants.
- ④The value put on the to the principal conditions in the neighborhoods by the inhabitants.

We chose Sano city as the object of this study. It has a population of 83,000 and it is in Tochigi prefecture. Sano city is composed of 90 hamlets under provision by the Census of Agriculture. We chose 22 hamlets as the objects of this study.

In this study, We sent out questionnaires to 1,016 inhabitants and received 917 replies. The results of the questionnaire showed following tendencies:

- ①On a question of the habitability, 58.3% of people were answered their lives were comfortable and 16.6% of people answered their lives were uncomfortable.
- ②The reasons of their comfortabilities were the environment of the city and the convenience on living.
- ③The answer "uncomfortable" was a minority but their reasons were the inconvenience on shopping, utility the regional facilities, and the trafical conditions.
- ④On a question of the intentions to continue the living in city, 77.4% of people answered to continue to live there.
- ⑤The reasons to continue living in city are given the existence of immovable properties, their personal histories in there, the existence of a family tomb and the existence of friends.
- ⑥The response to the question of the value put on the regional facilities, the highly valued items were infant schools, elementary and junior high schools, principal cultural facilities, and principal sports facilities.
- ⑦The low-valued facilities were the medical facilities, socialwelfare facilities for aged people, and the facilities of amusements, facilities of amusements, facilities for leisure and the small open space for aged people.
- ⑧The response to the question of the value put on the environmental conditions, there were no high-valued items in 12 items.
- ⑨Especially, as the low-valued items, there were the branch roads in hamlets, the street lamps, the drainage systems in lifes and the facilities of traffic safety.

key Words : 1) Local city and Surrounding Area, 2) Settling Down, 3) Conditions of Settling Down, 4) Social Over-head Capital, 5) Valuation by Inhabitants

(1996年1月8日 受理)

(1996年7月15日 再受理)